

# 学校における児童の居場所づくりに関する研究

## — 道徳の時間を要として、自他の心の充実感を育てる取組を通して —

A Study of Pupils' Making a Place of Their Own at School :  
Through Making Pupils' Finding Some Fulfillment of Their Emotions with Others Mainly by Moral Education

川野 和昭\* 穂原 桂\*\*

KAWANO Kazuaki HAGIHARA Katsura

**要約：**小学校学習指導要領道徳の目標には「道徳教育の目標は（中略）学校の教育活動全体を通じて道徳性を養うこと。道徳の時間においては（中略）各教科，総合的な学習の時間及び特別活動における道徳教育と密接な関連を図りながら，計画的，発展的な指導によってこれを補充，深化，統合し道徳的価値の自覚及びそれに基づいた人間としての生き方についての自覚を深め，道徳的実践力を育成するものとする」というねらいが示されている。道徳の時間を要として学校の教育活動全体を通してよりよく生きようとする内発的な力を育成することが求められている。しかし，現場においては「いじめ」「不登校」などの問題行動や学校現場の多忙化による道徳教育の形骸化などもあり道徳教育の充実は十分とは言えない。文部科学省は平成25年6月に「いじめ防止対策推進法」を公布し，具体的な手立てとして道徳教育の充実を切り口にしていじめ防止に取り組もうとしている。また次期学習指導要領の改訂案では，これまでの道徳の時間を小・中学校では「特別の教科 道徳」という教科として位置付け，検定教科書と評価を導入するなど道徳教育に大きな改革が起きようとしている。これまで以上に道徳教育の重要性が示されているものといえよう。本研究では，道徳の時間を要として，自他の心の充実感を育てるために，①道徳の時間の充実に関する取組②学校の教育活動全体を通して，子どもたちがよりよく生きようとする努力を認め勇気付けていく取組を行った。道徳の時間で心を耕し，その他の学校生活の中で子どもたちのよりよく生きようとする姿を認めていく指導を継続する中で学校が子どもたちの居場所となることにつながった。

**キーワード：**小学校道徳，道徳の時間の充実，総合単元的道徳学習，道徳的実践活動の充実 居場所づくり

## I はじめに

小学校学習指導要領（平成20年）では，子どもたちが，これからの社会において必要となる「生きる力」を身に付けることをねらいとしている。また，小学校学習指導要領道徳編（平成20年）では，「学校における道徳教育は道徳の時間を要として学校の教育活動全体を通して行うもの」とあり，道徳教育の重要性も欠かすことはできない。同特別活動編では，「学級活動の指導に当たっては，児童の学校生活の居場所としての学級という考えを重視し，児童一人一人が自らよりよい生活を過ごせるように援助する必要がある」ともある。

\* 甲州市立松里小学校・教職大学院院生 \*\* 教育人間科学域 教育学系

不登校問題への調査研究協力者会議による『今後の不登校への対応の在り方について』（平成15年）では、「自己が大事にされている、認められている等の存在感が実感でき、かつ精神的な充実感の得られる場所」として、「居場所づくり」について言及しており、児童にとって物心両面から「居場所」となる場が求められている。しかし、近年のいじめ・不登校などの諸問題をみると学校や教室が児童にとって良い「居場所」ではなくなってきたことが考えられる。

そこで、道徳の時間を要とし、児童が心の充実感（授業を含めて日々の生活が楽しく、精神的に安心して生活ができ、他者からも大切にされている）を覚えるような取組を学校の教育活動全体を通して行うことが児童の「居場所づくり」の一助につながるのではないかと考え、研究を進めた。

## II 先行研究

文部科学省の『登校拒否問題への対応について（初等教育局長通知）』（平成4年）では、「心の居場所」という言葉が使われ、これ以降、学校現場でも意識されるようになる。

相川（2006）、藤原（2010）などの「居場所とは何か」の研究もある。それをふまえて、本研究では、心理的意味を含めて「居場所」を「児童が、自分が大事にされている、認められている等の存在感が覚えられ、かつ他者から受容されていると感じ、精神的に安心して生活できる場所」と定義した。

押谷（1995）は、道徳の時間の目標、役割はそのままにし、その前後に子どもが主体的にかかわる道徳学習を計画し、それら一連の過程を道徳学習と考え、子どもたちが主体的に道徳学習をしていけるための支援の在り方を考える総合単元的な道徳学習を提唱した。

そこで、本研究では、児童の心の居場所づくりをめざして、道徳の時間を要として総合単元的な道徳学習の考え方を基盤として実践を行い研究を進めることにした。

## III 研究の目的

道徳の時間を要として児童の心の充実感を育てる取組を行うことで、居場所づくりの方策についてどのようなものが有効なのか研究を行う。

## IV 研究の方法と内容

### (1) 実習校と実習方法

- ①実習校：山梨県内公立 A 小学校
- ②実習期間：平成25年5月～12月
- ③対象学年：第4学年（週1回の実習：授業観察、授業の実施等）
- ④授業実践：道徳の時間、国語、図画工作、特別活動、他

### (2) 研究の方法と内容

- ①総合単元的な道徳学習の考え方を取り入れた道徳年間指導計画の作成
  - ・道徳年間指導計画（試案として今年度は4年生のみ）を作成する。
- ②アンケートの実施と分析
  - ・児童の理解、現状把握のためにアンケートを行う。分析して次にあげる道徳学習プラン作成のための資料とする。
- ③道徳の内容項目の中から重点として選んだ内容項目に関する道徳学習プランの作成
  - ・②の結果を分析し、学校・学年課題をふまえ、重点として取り組む必要のある道徳の内容項目を選ぶ。それに関連する学習内容を位置付けたものを道徳学習プラン（今年度は、試案として4年生の友情・信頼・助け合い）として作成し、実施する。
- ④道徳の授業の工夫により児童に心の充実感を育てる取組の実施

- ・児童に自分の考えをもたせるための心のカードの導入、学習ノートの工夫、発問の工夫など、道徳の時間を行う際に様々な工夫を行い価値の自覚を深め道徳的実践力の育成を図ろうとした。

⑤道徳的実践活動の実施

- ・③で重点として選んだ、内容項目をより深く意識させるために「友情の木」づくりを行う。

⑥重点として選んだ内容項目を意識した教科指導の実施

- ・③で選んだ内容項目と教科指導（今年度は、国語、図工）との関連をはかり、ねらいとする内容項目を教科とゆるやかに関連させて自覚を促す。

⑦個人ノートによる関係づくり

- ・教師と児童一人一人をつなげるツールとして「個人ノート」を導入し、教師と児童との良好な関係づくりにつなげる。

## V 研究の結果と考察

### (1) 総合単元的な道徳学習の考え方を取り入れた道徳年間指導計画の作成

道徳教育推進のためには、道徳の時間を要として学校の教育活動全体を関連させた意図的・計画的な指導計画が必要になる。そこで、実習校の各教科をはじめとするすべての教育活動を洗い出し、心のノートとも関連をはかる中で表1のような4年生分の道徳年間指導計画を試案として作成した。

作成することによって、中学年で18ある道徳の内容項目を道徳の時間以外でも意識する教師の姿が見られた。道徳の時間に、追求・把握した道徳的価値の実践の場として行事などを位置付けることにより、一つ一つの道徳的価値の自覚を学校の教育活動全体の中でより深く行うことができる。年間を通してすべての内容項目をこのようなスタイルで学習を積み重ねることが、児童の心の成長を促し、心の充実感につなげる年間指導計画になるものと考えられる。今年度は4年生用を試作したが、心の居場所づくりの一助として全学年の作成が望まれる。

表1：4年生、道徳年間指導計画

道徳指導計画4年①					
4年生	【主題名】・資料名	ねらい	指導要領との関連	資料類型	【心のノート】との関連 他の教育活動 地域との関連
4月	【心あわせて作る学級】 さくらの下でみんながわらった	先生や友だちと力を合わせ、よりよい学級を作っていくという心情を育てる。 【主な発問例】 ○4年2組の子どもたちは、梅沢先生をどう思っていたのだろう。 ●先生が退院して教室に姿を見せた時、みんなはどんな気持ちで迎えたか。 ○この学校、このクラスでよかったと思ったことがあるか。	4(4) 愛校心	ノンフィクション	(終末)でP.84～P.85に自分の気持ちを書き込んでまとめをさせる。 ④学級開き
	【まごころをもって】 春の星	礼儀の大切さに気づき、だれに対しても真心をもって接しようとする気持ちを育てる。 【主な発問例】 ○次々に「お先に。」と言われて、人びとはどんな気持ちになったか。 ●自分の番のとき、「わたし」はどんな気持ちで「お先に。」と言ったのか。 ○あいさつしたときの自分の気持ちを思い出してみよう。	2(1) 礼儀	エッセイ	⑩安全な暮らしと地域づくり ⑪1年生を迎える会
5月	【心の中にある決まり】 雨のバス停りゅう所で	社会生活を円滑にするために必要な、目に見えない約束事を尊重しようとする態度を培う。 【主な発問例】 ○雨の中へかけ出したよし子は、どんなことを思ってそうしたのか。 ○後ろに連れていったお母さんが、とても怖い顔だったのはなぜか。 ●順番を守る自分と、列を乱して先に乗ろうとする自分とを想像してみよう。	4(1) 規則の尊重・公徳心	生活文	(終末)でP.70～73に書き込ませ、児童の体験を発表させる。
	【みんなのためにつくす人びと】 あと三十分おくれたら	日々の生活が人々の支え合いや助け合いで成り立っていることに感謝し、それにこたえようとする心情を養う。 【主な発問例】 ○正夫はどんな気持ちで救急隊の人たちを案内したのか。 ●あいさつをして、走りまわっていく救急隊を目送ったとき、正夫はどんな気持ちになったか。	2(4) 尊敬・感謝	生活文	⑩安全な暮らしと地域づくり ⑫やさしい心

(2) アンケートの実施と分析

児童の実態を把握することが何よりも大切である。そこで、自作のアンケートを実施し、実態の把握に努めた。文部科学省、国立教育研究所の「児童の問題事象の未然防止に向けた生徒指導の取り組み方」(平成22年)の中から、心の充実感に関係する、自己有用感・学校適応・周りからの理解や支えに関する項目を取り出し、それに、道徳の時間に関するものを加えて作成し、実施した。

4つの選択肢から選び、1が肯定的、4が否定的という形にした。よって、集計では、数値が低いほど児童の満足度が高いということになる。実態を見ることに加え、それを基に道徳の内容項目の中から重点とした項目の選定の参考にし、児童の自他の心の充実感の変化をみる資料としても用いた。7月と12月の比較も行った。数値は、表2のとおりである。

7月のアンケートで見えてきたのは、「友達に喜んでもらえた・感謝された・役に立った」という他者から受容されていると感じられる自己有用感の項目に課題があることがわかった。そこで、友達との良好な関係づくりに取り組むという方向性が見えてきた。よって、このことに大きく関わる、道徳の内容項目である、2-(3)友情・信頼・助け合いを重点とした道徳学習プランをつくり実践を図ることにした。これは、普段の生活の中でも、重点とした項目を意識させる実践活動として「友情の木」づくりを行うきっかけともなった。

アンケートを実施することで児童の実態や課題が見えてきた。居場所づくりのためにどのような取組が児童に必要なかを考えるきっかけになった。児童の実態や願いを把握することの有効性を改めて感じた。

表2：アンケートの結果と内容

1が最も肯定的、4が最も否定的、数値はクラス平均である。平均値が低いほど肯定的であることを示している。

自己有用感	友達に喜んで	友達に感謝され	友達の役に立っ	意欲	道徳の時間が楽
7月	1.83	2.13	1.88	7月	2.23
12月	1.71	1.64	1.65	12月	1.62

学校適応	学校が楽しい	みんなで何かするのは楽しい	次の学年も今のクラスでいたい	授業がよくわかる	自慢できるものがある。	周囲のサポート	おうちの人が励ましてくれる。	先生が励ましてくれる。	友だちが励ましてくれる。
7月	1.28	1.33	1.43	1.58	1.43		1.78	1.73	1.63
12月	1.21	1.21	1.16	1.51	1.42		1.55	1.54	1.43

周囲のサポート	周りの人が悩みをきいてくれる	先生が悩みをきいてくれる	友だちが悩みをきいてくれる	周囲のサポート	周りの人がわかっていてくれる。	先生がわかっていてくれる。	友だちがわかっていてくれる。	態度	進んで発表している	友だちの考えを聞こうとしている	友だちの意見を取り入れようとしている。
7月	1.63	1.48	1.63		1.73	1.53	1.58	7月	1.83	1.28	1.53
12月	1.43	1.49	1.43		1.45	1.50	1.52	12月	1.62	1.45	1.59

(3) 道徳の内容項目の中から重点として選んだ内容項目に関する道徳学習プランの作成

前述のアンケートの結果をふまえて、道徳の内容項目、「信頼・友情・助け合い」を核とした道徳学習プランの作成を行った。図1のように、道徳の時間を複数位置付け、それに関連する各教科、総合的な学習の時間、学校行事等の中から関係する学習活動を洗い出した。

道徳の授業は、時数を確保し、ただ、他の教育活動との関連性をもたせれば効果が上がるというものではない。そこには、児童の実態をふまえた、意図的・計画的な重点的指導の視点が必要となる。例えば運動会の時期は、友達とのトラブルが発生する可能性が高い。そこで、この時期に「卓球は4人まで」という道徳の授業を行うことで日常の生活で友達関係を意識させる。児童が友達とどのような関係が望ましいかを考える時間を確保する。また、道徳の時間で児童が考え、行事の中などで実行できた姿を教師が見つかり賞賛した。この一連の学習によって児童の道徳的実践力の高まりが期待できるように思われる。

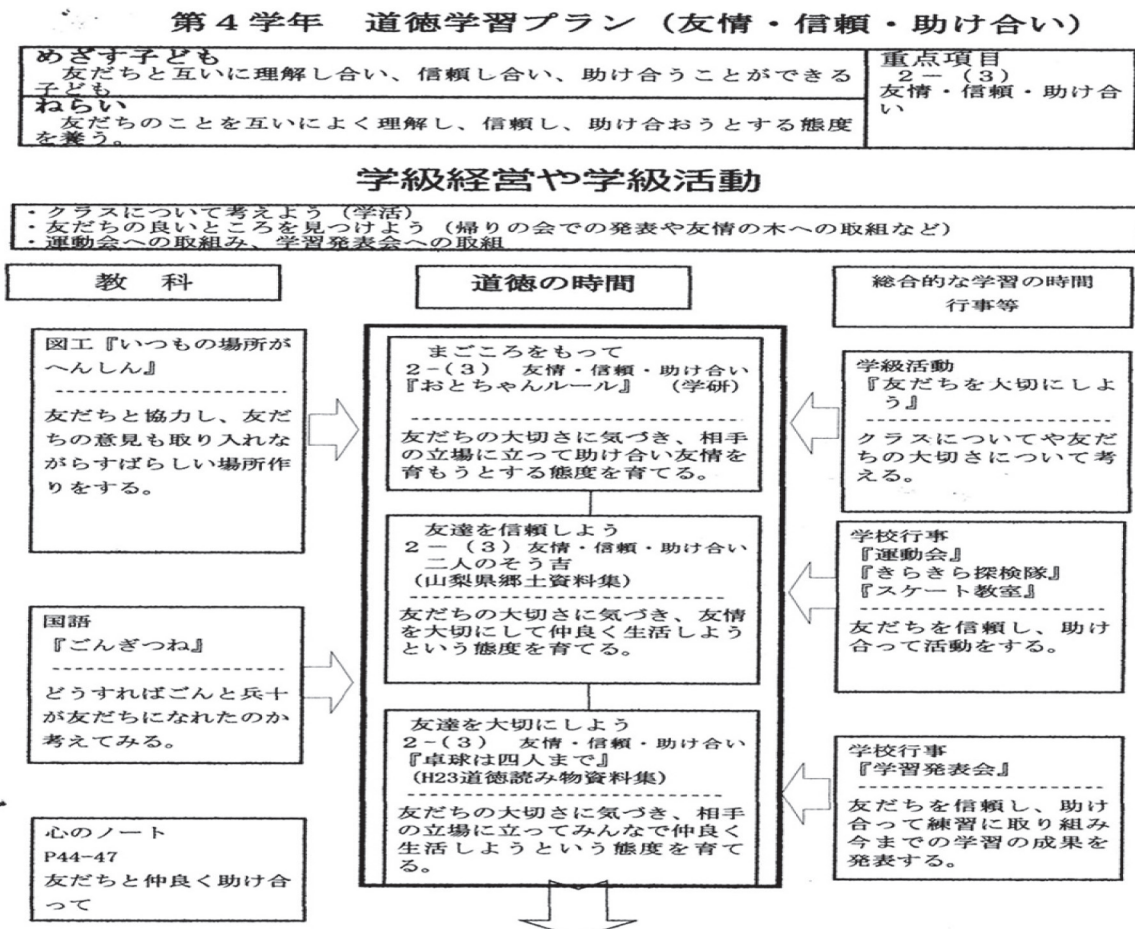


図1：道徳学習プランの例

(4) 道徳の授業の工夫により児童に心の充実感を育てる取組の実施

児童が心の充実感を得られるためには、要とする道徳の授業の充実が不可欠である。しかし、7月のアンケートでの「道徳の時間が楽しみ」という項目（1がとても楽しみ、4がそうではない）のクラス平均の数値が2.23であった。これは、他の項目より児童の満足度が低い。そこで、道徳の授業において次の取組を行った。重視したのは、児童が自分の考えをもつことである。自分の意見を持ち、それを発表し、友達や教師に伝えることによって心の充実感が得られると考えた。

①心のカードの導入

児童が自分の意見を持ち、表現できるためのツールとして心のカードを使用した。2色のカードを使い、自分の考えがどちらに近いのかや中間も表せるようにした。他の教師の感想でも「児童の意見や葛藤する場面がわかって良かった」などの評価をいただいた。葛藤場面や対立する考えが予想される場面では、有効なツールと考えられる。様々な場面での活用が考えられる。

②ノートの記述の工夫と、発問の使い分けなどにより自分の考えをもたせ心の充実感を育てる取組

学習ノートに2つの枠を設定した。教材分析をし、一つ目の枠は、資料を通してねらいとする道徳的価値を考えて記述する。もう一つの枠は、ねらいとする価値をより深く自分との関わりの中で見つめることとした。一単位時間を有効に活用するために、発問を精選し、状況をつかむ場面では事実関係を挿絵などを使って行い、主人公の行動や考えを鑑としてねらいとする価値を自分との関わりで考えさせる場面は時間をかけて考えさせるなど、メリハリをつけて授業に取り組んだ。

図2の児童Aは、最初は自分の考えをもてず、記述することもできなかった。しかし、学習を重ねるごとに少しずつ自分の考えをもてるようになった。11月の記述では、運動会で教師から賞賛された、色別チームのリーダーとして意欲的に活動した様子を書いていた。

また、他の児童の記述内容を見ると、図3の児童Bのように、主人公の生き方から自分の今後の生活への意識がもてている記述も見られる。

9/1 「卓球は4人まで」心のカード  
4年 名前( )

○しゅんの「何ともいえない気持ち」ってどんな気持ちでしょう。

自分の意見を書くことができなかった

○今日の話や今までの自分を振り返って「だれとも仲良くするために」できることを考えましょう。

こんどからなかくする

○自分の考えをもてましたか。  
もてた すこしもてた あまりもてなかった もてなかった

10/8 「ジャングル大帝」心のカード  
4年 名前( )

○レオは、どうして戦うのはだめだといっただけでしょう。

人間がかわいそうたり単独なのはダメだと思いました。

○レオの生き方で思ったこと感じたことを書きましょう。

ほんとうにレオは人のこころをあたりにしてくる人だけよーと思います。

最初の2回は自分の考えがあまりもてなかった

○自分の考えをもてましたか。  
もてた すこしもてた あまりもてなかった もてなかった

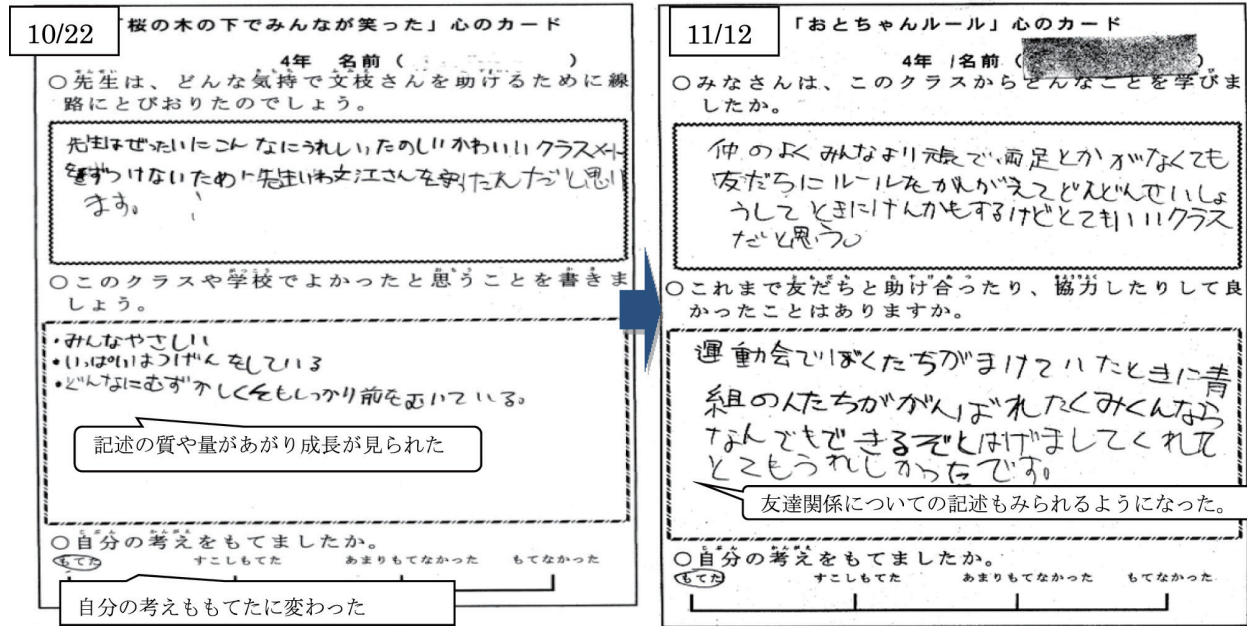


図2：児童Aのノートの様子（9月から11月の記述より）

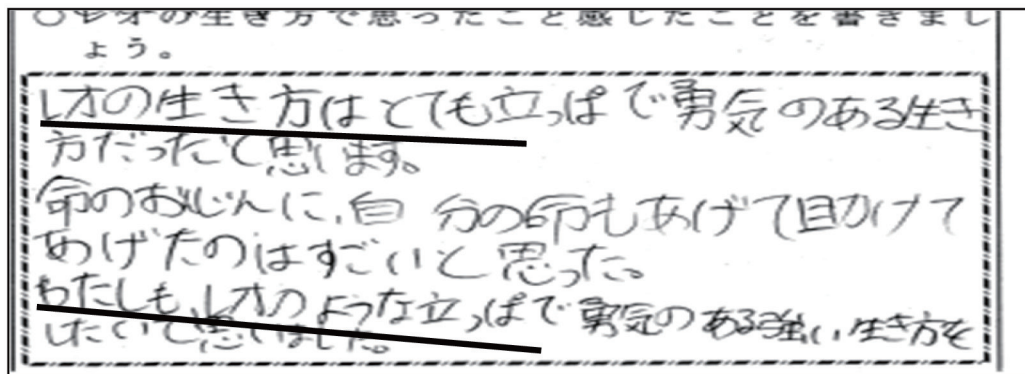


図3：児童Bのノートの記述

続いて、図4に学習ノートの「自分の考えをもてましたか」に関する結果を示した。回数を重ねるごとにクラス平均の数値の上昇が見られた。児童が自分の考えがもてるようになったことが伺える。

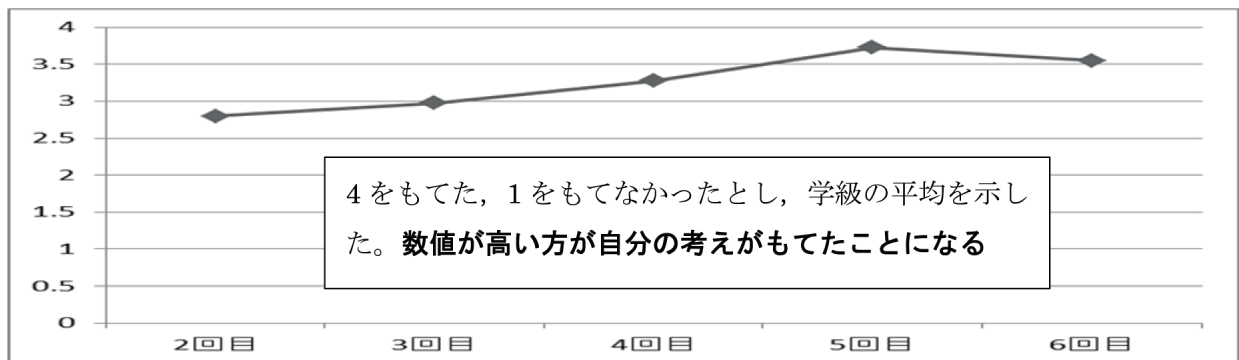


図4：各授業ごとの「自分の考えがもてたか」の集計値

本研究を行った実習校は、道徳の時間の授業の充実に力を入れている。道徳の実施時数も確保され、この学習ノートの取組も、4年生の日常的な取組としても実践している。こういった取組の継続が

児童の自己の振り返りの充実につながったように思われる。今後の授業づくりにこれらの学習ノート工夫も生かしていきたい。工夫した道徳の授業を行うことで、自己の生き方を見つめることが深まり、道徳的実践力の育成に寄与することが伺える。

#### (5) 道徳的実践活動の実施

道徳学習プランで、重点とした「友情・信頼・助け合い」の内容項目を児童に意識させるために、学習プランに加えて日常生活でも友達の良い点を見つけさせる「友情の木」づくりを行った。児童が友達にしてもらってうれしかったことを書いてボードに貼るというものである。一学期は、児童の自由意志に任せてみた。9月からは、運動会への取組や道徳の授業など、道徳学習プランで重点とした内容項目を意識させた。7月までの木には10人の記入、12月までの木には21人が記入という結果になった。図5の記述内容を見ると、同じ児童が一学期の「先生が優しくしてくれた」という言葉から「友達に手伝ったらありがとうと言われた」に変わり、友達に目が向く変容も見られた。友達の良いところを書いたり、書いてもらったり、木の記述からこんな行為が喜んでもらえることを知ったりすることにより、人と人とのふれあいが生まれ友達に大切にされている、友達を大切にしようという自他の心の充実感を児童に味わわせることにつながったと思われる。

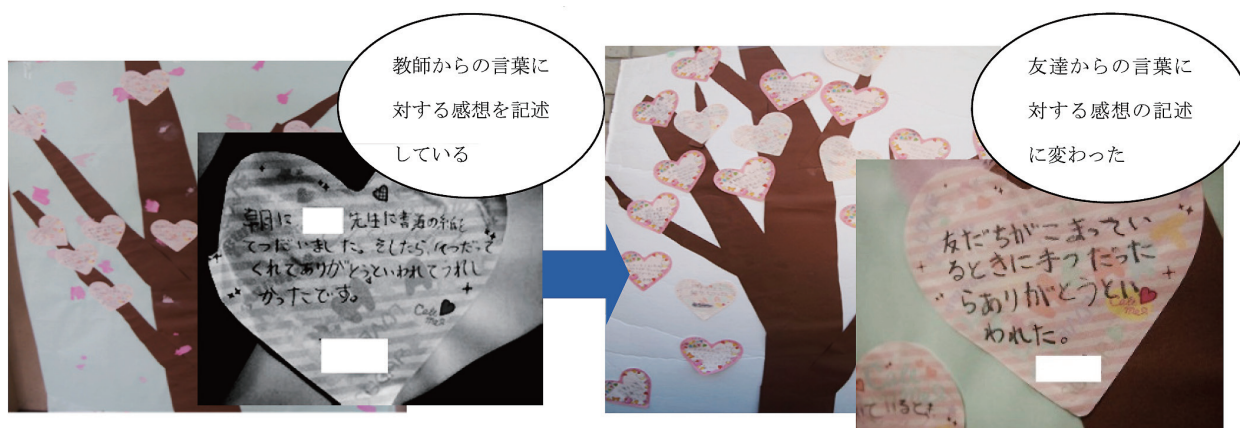


図5：木の変化の様子と記述

#### (6) 重点として選んだ内容項目を意識した教科指導の実施

道徳学習プランの計画に従って、国語と図工の授業を行った。教科としての目標の達成をする中で、国語ではごんぎつねでごんと兵十との関係から友情の大切さを意識させてみた。図工では、楽しみながら友達と協力して作品を完成させるねらいをめざす中で友達の良いところを見つける活動を仕組んだ。教科の目標を達成させる中で児童に育てたい道徳的価値を意識しながら教師が指導することがポイントだが、教科のねらいを超えないゆるやかな関連性をもつ程度にとどめることを心がけた。図6の記述から児童は、国語では、ごんの生き方を通して友情に関する自分なりの意見を書いていた。また、図工では、鑑賞以外で友達のリーダー性などの良い点を見付けていた。教科の目標を達成する中に、教師が学習内容によっては道徳的価値を意識しながら指導することで、「補充：補い」「深化：深め」「統合：見いだす」という各教科との関連を意識する取組ができた。今回の学習指導要領では、各教科の「指導計画の作成と内容の取扱い」の中に道徳の時間などとの関連を考慮して各教科の特質に応じて適切な指導をする事が明記されたが、具体的な実践として取り組むことができた。



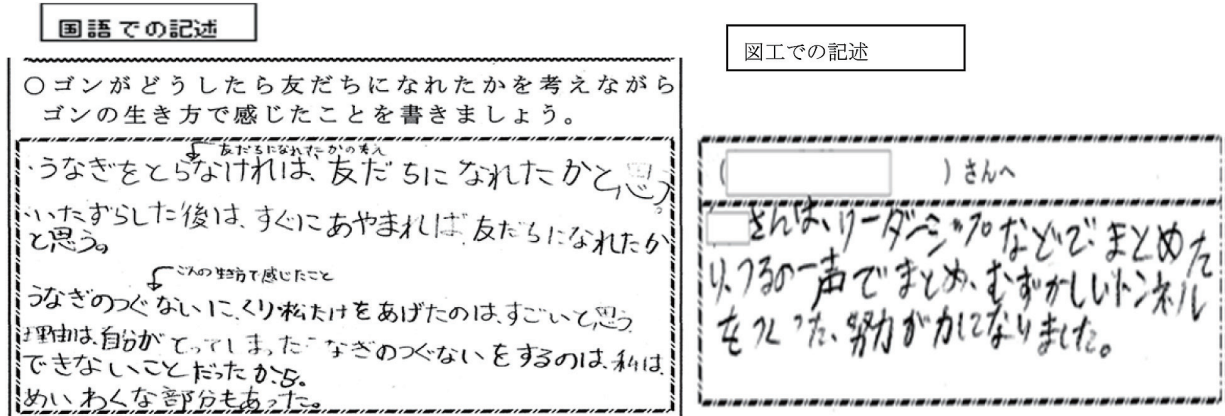


図6：児童の授業での記述

### (7) 個人ノートによる関係づくり

児童理解を深める上で相互の信頼関係が、とても大切である。そこで、毎週実習校の4年生と個人ノートによる情報交換をした。ある児童は、ノートに自分の悩みを書いてきた。教師は、共感を示しながらその日に返信をした。その後、教育相談をして悩みの解決をはかることができた。次の週のノートでは、「先生に話したのですっきりした」と書いてきた。児童の悩みを相談できるツールとなり、心の充実感にもつながったようである。

12月に実施したアンケートでは、「個人ノートをやってみてどうでしたか」との設問を設けた。記述で、多かったのは、「みんなにいけないことがかけるからよかった」が7人、「自慢が書けてよかった」「先生にぼくのことを知ってもらえた」が各3人であった。これらの記述から、このノートが教師と児童一人一人をつなぐツールとなり、不安を感じたら相談できるという安心感と、自分の良いところを書けるという満足感を育てることにつながったように思われる。

## VI 成果と課題

図7のアンケート結果では道徳の時間を楽しいと受け止める児童が増加している。図8でも、「友達に感謝された」という項目で友達からの感謝の気持ちを感じ取る児童の割合が増加している。学習ノート、個人ノート、友情の木の児童の記述も回数を重ねるごとに質的・量的な高まりが見られた。

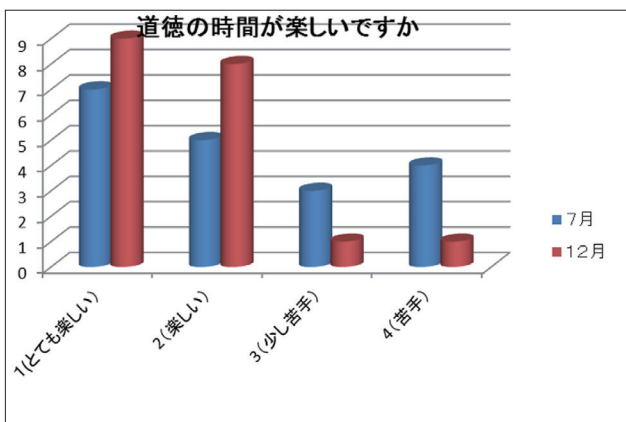


図7：「道徳の時間が楽しいですか」の分布

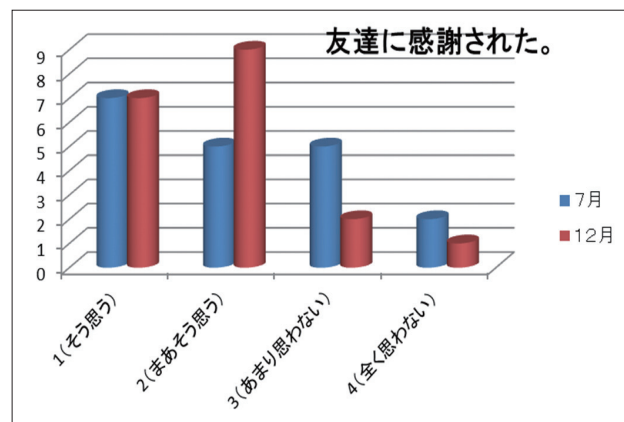


図8：「友達に感謝されたという項目」の分布

ここで、児童Dの変容を見てみたい。児童Dは、図9のように7月には、すべての項目に対して否定的な考えを示し、孤独感を強く感じている様子が見受けられた。実習中に、気かけ多くの声かけをした児童の一人である。道徳の時間では、教師側が意識して意見を求めたり、助言を行った

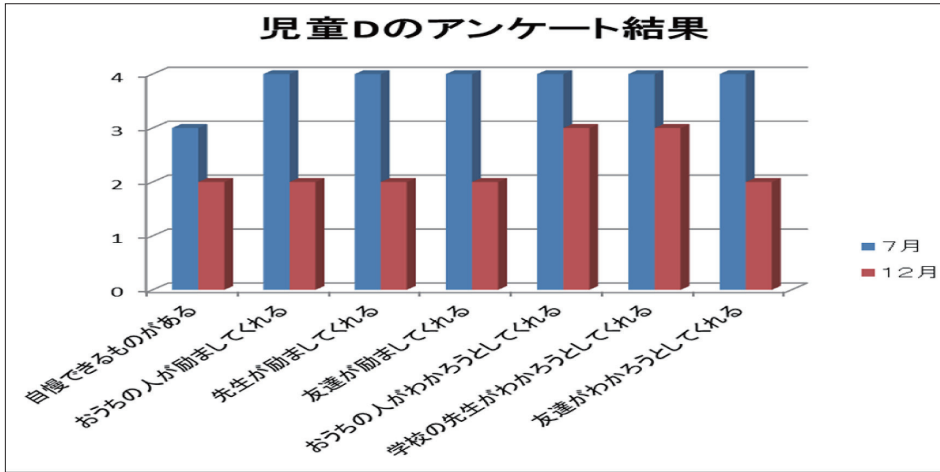


図9：児童Dのアンケート結果

場面	Dさんの様子	教師の評価・はたらきかけ
5月、教室	このクラスの良いところは、「先生がやさしいから」と答える	一人で読書をしていることが多い。
6月 授業中 6月Q-Uアンケート	発言が少ない 満足度が低い	自信がなさそうである 家族をふくめ周囲すべてへの満足度が低いようである。
6月道徳「一枚の金貨」	感想に、「家族というのが理解できた」と記述	意識的に発言を取り上げた。
7月休み時間	友達と遊ぶ姿が見られた	休み時間に外に連れ出して友達とふれあわせた。
7月道徳「電車での出来事」	これからの自分に生かすこととして「ありがとうが大切」と記述	自分の意見を友達の前でいえることができた。
9月道徳「卓球は4人まで」 運動会への取組	たれとでも仲良くするために「親切にしてあげたりする」と記述 走ることが得意なので友達からほめられた。	たくさん手を挙げて友達から賞賛された。 自信をもつように声かけをした。
個人ノート	自分の紹介と得意なことを書いてくれた。	はじめて記入があった。
10月道徳「ジャングル大帝」	主人公の生き方から「やさしいと思った」と記述	授業後、「道徳の時間が楽しみ」と言ってくれた。
10月道徳「桜の下でみんなが笑った」	このクラスで良かったところが、「みんなを笑顔にできる人がいて友達が優しく教えてくれる」に変わった。	指導教官も記述や様子から周囲とのコミュニケーションが取れてきたとの評価
10月図工「いつもの場所が変身」	独創的な作品を作り上げ。それを友達にほめられた。クラス全員にそれを伝えることもできた。	周囲にいいところをどんどん言ってあげてと助言した。
11月道徳「おとちゃんルール」	友達と助け合って良かったことを「給食の時協力して早く終わった」と記述	友達のことの記述が多くなった。

教師からの働きかけ

10月道徳「桜の下でみんなが笑った」	このクラスで良かったところは「みんなを笑顔にできる人がいて友達が優しく教えてくれる」と友達の良さを書いている
個人のノートや友情の木の感想	人を思いやることの大切さを知った

友達からの働きかけ

( D ) さんへ

Dさんは、なにもしないでくれたおかげで、おんなじになりました。みらいがのれるところもすてきだったと思いました。

心が変化  
した

図10：児童Dの図工の時間の取組を友達がほめてくれた記述

りした。日常生活でも友達と積極的に交流をもたせるようにした。児童Dの様子を表3にまとめたが、本人は一連の学習の中で家族の大切さや、優しさ、友達との協力について記述が見られるよう

になった。また、図 10 のような友達からの励ましも自信につながったと思われる。このような周囲からのサポートが得られたことで、7月に比べてとても明るくなり、授業中も積極的な発言が見られた。表 4 では、人を思いやることや人の優しさを知った様子が書かれている。アンケートの数値も図 9 のように良い方向への変化が見られた。断定はできないが、道徳の時間を確保し道徳の時間を要として学校の教育活動全体で行った数々の取組が、児童の自他の心の充実感を育てることにつながったように思われる。半年間実習校で過ごさせていただいたが、日を追うごとに児童 D に対してクラス全体で声をかけ、一緒に活動する姿が多くなった。周りの児童の心の充実感が育ったことと児童 D の心の充実感の育ちが相乗効果を上げたように思う。

一方で、個人ノート、友情の木、国語や図工の学習感想では、教師が求めている内容の記述に個人差が見られた。多くの児童が参加できる働きかけはどのようなものが今後の課題である。

## VII おわりに

道徳の時間を要として、自他の心の充実感を育てるさまざまな取組について研究し、実践したことが、自分自身の大きな財産となった。今年度は、四年生だけの研究になったが、この取組を学校教育全体で実践し、家庭や地域も巻き込む形で児童の心の居場所づくりにつなげていきたい。

(附記)本研究は次の分担により行われた。研究の企画と授業や道徳的实践活動などは川野が行った。研究全体の指導は蘆原が行い、川野が執筆した論文に蘆原が加筆修正した。

### (引用・参考文献)

- ・文部科学省 (2008) 「小学校学習指導要領則」
- ・文部科学省 (2008) 「小学校学習指導要領解説 道徳編」
- ・文部科学省 (2008) 「小学校学習指導要領解説特別活動」
- ・文部科学省 (2010) 「生徒指導提要」
- ・文部科学省 (1992) 「登校拒否問題への対応について」
- ・国立教育研究所 (2010) 「児童の問題事象の未然防止に向けた生徒指導の取り組み方」
- ・押谷由夫・内藤俊史 (2012) 「道徳教育への招待」ミネルヴァ書房
- ・押谷由夫 (1995) 「総合単元的道徳学習の提唱」文溪堂
- ・相川充 (2006) 「心の居場所としての学級づくり」児童心理 60 巻 2-10
- ・藤原靖浩 (2010) 「居場所定義についての研究」関西大学教育学論文